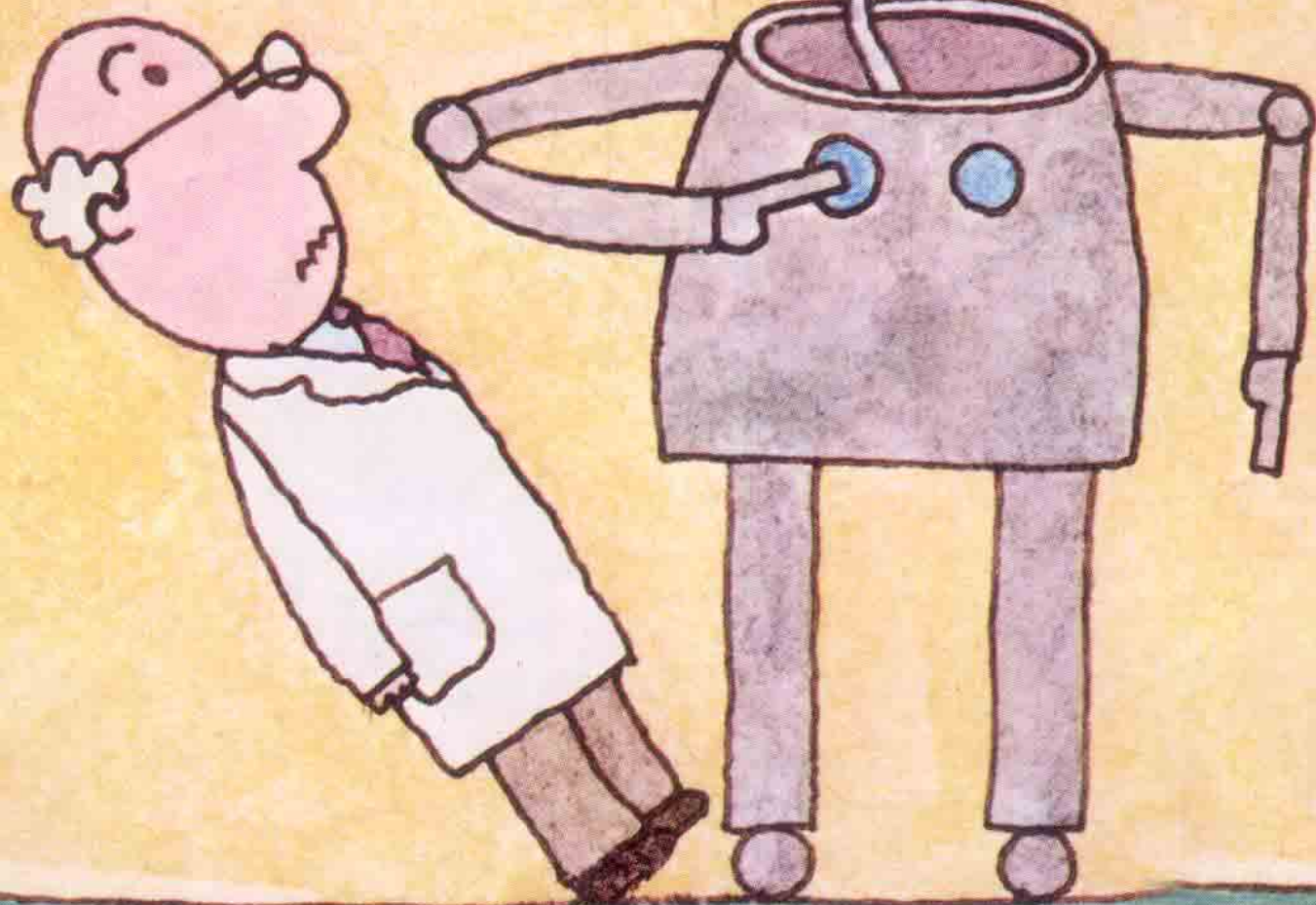


星新一
ままぐれ
ロボット



きまぐれロボット

ほし しんいち
星 新一



角川文庫 2856

昭和四十七年一月五日 初版発行
平成三年六月十日 八十版発行

発行者 角川春樹

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

編集部(〇三)三八一七―八四五―
電話

営業部(〇三)三八一七―八五二―

千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所 旭印刷 製本所 大谷製本

装幀者 杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送り
ください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

きまぐれロボット

星新一



角川文庫 2856

目次

新発明のマクラ

試作品

薬のききめ

悪魔

災難

九官鳥作戦

きまぐれロボット

博士とロボット

便利な草花

夜の事件

地球のみなさん

ラッパの音

おみやげ

七 二 六 五 四 三 二 一 〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一

夢のお告げ

失敗

目薬

リオン

ボウシ

金色の海草

盗んだ書類

薬と夢

なぞのロボット

へんな薬

サーカスの秘密

鳥の歌

火の用心

スピード時代

キツツキ計画

ユキコちゃんのしかえし

四

六

七

四

七

八

八

九

七

一三

一六

一〇

二四

一九

二四

三九

ふしぎな放送

ネコ

花とひみつ

とりひき

へんな怪獣

鏡のなかの犬

あーん。あーん

解説

一三四

一三八

一四四

一五二

一五五

一五九

一六三

谷川俊太郎 一六九

さし絵 和田 誠

というわけだ」

「なんだか便利そうなお話ですが、それで、どんな勉強ができるのですか」

「これはまだ試作品だから、英語だけだ。眠っているうちに、英語が話せるようになる。しかし、改良を加えれば、ほかの勉強にも、同じように使えることになるだろう」

「驚くべき発明ではありませんか。どんななまけ者でも、夜、これをマクラにして寝ていさえすれば、なんでも身についてしまうのですね」

おとなりの主人は、ますます感心する。博士は、とくいげにうなずいて答えた。

「その通りだ。近ごろは、努力をしたがらない人が多い。そんな人たちが、買いたがるだろう。おかげで、わたしも大もうけができる」

「ききめが本当にあるのなら、だれもが欲しがるにきまっていますよ」

「もちろん、ききめはあるはずだ」

おとなりの主人は、それを聞きとがめた。

「というのと、まだたしかめてないのですか」

「ああ、わたしはこの研究に熱中し、そして完成した。しかし考えてみると、わたしはすでに英語ができる。だから、自分でたしかめてみることに、できないのだ」

と、博士は少し困ったような顔になった。おとなりの主人は、恥ずかしそうに身を乗り出し

新発明のマクラ

「やれやれ、なんとか大発明が完成した」

小さな研究室のなかで、エフ博士は声をあげた。それを耳にして、おとなりの家の主人がやってきて聞いた。

「なにを発明なさったのですか。見たところ、マクラのようですが」

そばの机の上に大事そうに置いてある品は、大ききといい形といい、マクラによく似ている。「たしかに、眠る時に頭をのせるためのものだ。しかし、ただのマクラではない」

と、博士はなかをあけて、指さした。電気部品が、ぎっしりとつまっている。おとなりの主人は、目を丸くして質問した。

「すごいものですね。これを使うと、すばらしい夢でも見られるのでしょうか」

「いや、もっと役に立つものだ。眠っていて勉強ができるしかけ。つまり、マクラのなかにたくわえてある知識が、電磁波の作用によって、眠っているあいだに、頭のなかに送りこまれる

て言った。

「それなら、わたしに使わせて下さい。勉強はめんどくさいが、英語がうまくなりたいと思っていたところです。ぜひ、お願いします」

「いいとも。やれやれ、こうすぐに希望者があらわれるとは、思わなかった」

「どれくらい、かかるのでしょうか」

「一ヵ月ぐらいで、かなり上達するはずだ」

「ありがとうございます」

と、おとなりの主人は、新発明のマクラを持って、うれしそうに帰っていった。しかし、二ヵ月ほどたつと、つまらなそうな顔で、エフ博士にマクラを返しにきた。

「あれから、ずっと使ってみましたが、いっこうに英語が話せるようになりません。もう、やめます」

博士はなかを調べ、つぶやいた。

「おかしいな。故障はしていない。どこかが、まちがっていたのだろうか」

だが、ききめがなければ、使い物にならない。せっかくの発明も、だめだったようだ。

それからしばらくして、エフ博士は道でおとなりの女の子に会った。声をかける。

「そのご、おとうさんはお元気かね」

「ええ。だけど、ちょっとへんなことがあるわ。このごろ、ねごとを英語で言うのよ。いままで、こんなことなかったのに。どうしたのかしら」

眠っているあいだの勉強が役に立つのは、やはり、眠っている時だけなのだった。

試作品

エム博士の研究所は、静かな林のなかにあった。博士はそこにひとりで住んでいる。町から遠くはなれているので、だれもめったにたずねてこない。

しかし、ある日、あまり人相のよくない男がやってきた。

「どなたでしょうか」

と博士が聞くと、男はポケットから拳銃を出し、それをつきつけながら言った。

「強盗だ。おとなしく金を出せ」

「とんでもない。わたしは貧乏な、ただの学者だ。もともと、長いあいだの研究がやっと完成したから、まもなく景気がよくなるだろう。しかし、いまのところは、金などない」

こうエム博士は答えたが、そんなことで、強盗は引きさがりはいしない。

「では、その研究の試作品をよこせ。どこかの会社に持ちこんだら、高い金で買いとってくれるだろう」

「だめだ。渡さない。ひとの研究を横取りしようというのは、よくない精神だぞ」

「それなら、ひとりで探し出してみせる」

強盗は、逃げ出さないようにと、博士の手を引っぱって、研究所のなかを調べまわった。しかし、試作品らしいものは、どこにも見あたらない。

最後に小さな地下室をのぞいた。なかはがらんとしていて、机とイスが置いてあるだけだった。強盗は博士に言った。

「どうしても渡さない気なら、ただではすまないぞ」

「拳銃の引金をひくつもりなのか」

「いや、殺してしまつては、品物が手に入らない。いやでも渡す気になる方法を、考えついたので。さあ、この地下室に入れ」

「いったい、わたしをどうしようというのだ」

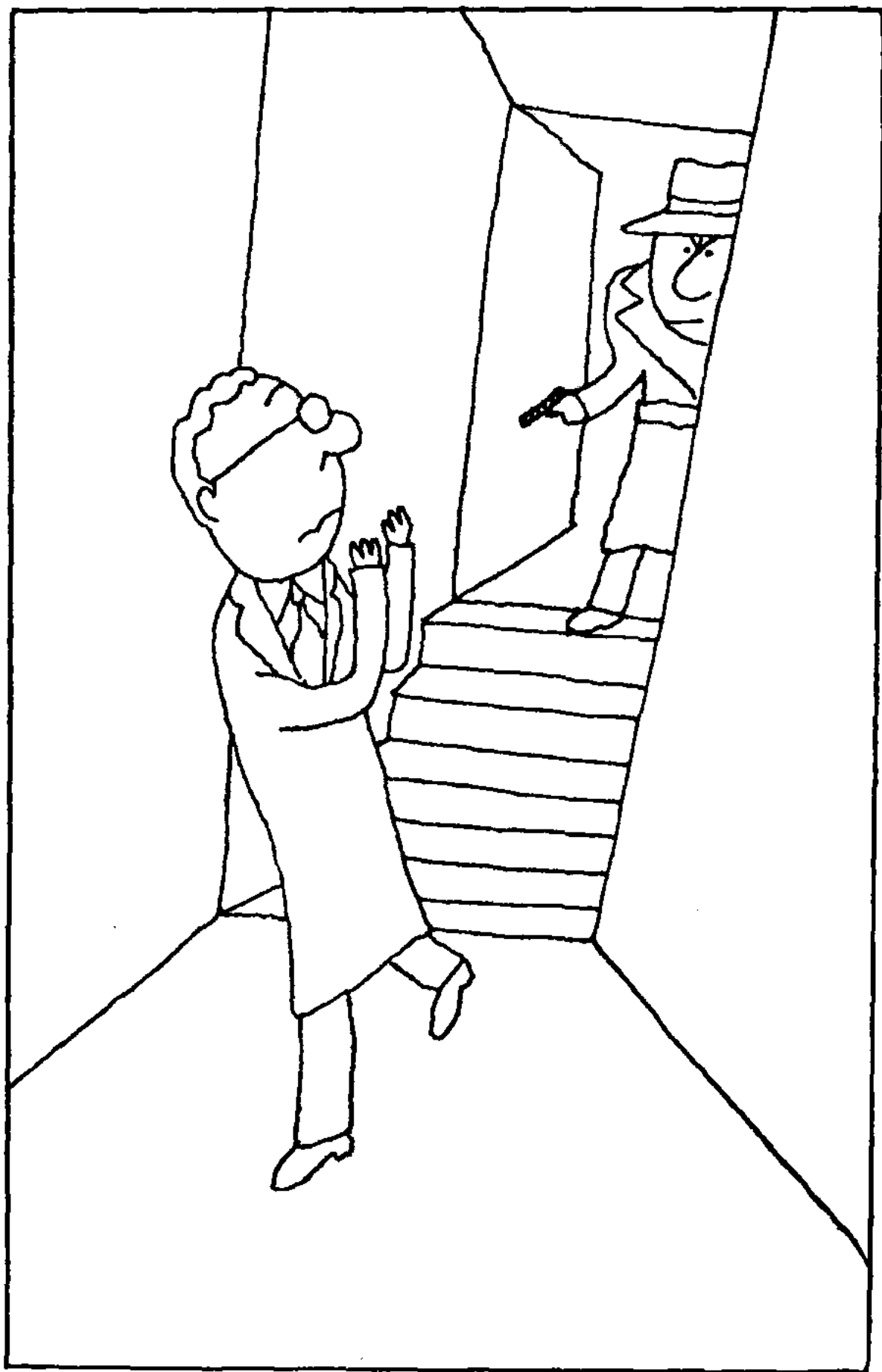
「あなたを、このなかにとじこめる。おれは、入口でがんばることにする。そのうち、空腹のため悲鳴をあげるだろう。品物を渡す気になったら、すぐに出してやる」

「ひどいことを思いついたな。だが、そんな目にあわされても、決して渡さないぞ」

博士はあくまでことわり、ついに地下室に押しこまれてしまった。

かくして、一日がたった。強盗は入口の戸のそとから、声をかけた。

「さぞ、おなかがすいたことだろう。いいかげんで、あきらめたらどうだ。こっちは食料があ



るから、当分は大丈夫だ」

「いや、わたしは絶対に負けないぞ」

「やせがまんをするなよ」

しかし、その次の日も、そのまた次の日も同じことだった。声をかけると、なかで博士が元気に答える。時には、のんきに歌う声も聞こえてくる。

一週間たち、十日が過ぎた。

まだ博士は降参しない。そのころになると、強盗のほうが弱ってきた。手持ちの食料もなくなりかけてきたし、戸のそとでがんばっているのにも、あきた。それに、なにも食べないでいるはずなのに、あいかわらず元気な博士が、うすきみ悪く思えてきたのだ。

「もうあきらめた。いつまでいても、きりがなさそうだ。引きあげることにするよ」

強盗は、すごすごと帰っていった。エム博士は地下室から出てきて、ほっとため息をついた。それから、こうつぶやいた。

「やれやれ、やっと助かった。試作品が地下室にあったとは、強盗も気がつかなかったようだ。わたしの完成した研究とは、食べることでできる机やイスを作ることだったのだ。おかげで、その作用を自分でたしかめることになってしまった。栄養の点はいいが、もう少し味をよくする必要もあるな。きっと将来は、宇宙船内や惑星基地での机やイスには、すべてこれが使われ

るようになるだろう。そして、万一の場合には、大いに役に立つにちがいない」